determent

零矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
determent

【Ｎコード】
Ｎ２１９６Ｃ

【作者名】
零矢

【あらすじ】
地球滅亡寸前に未知の生物が現われ、人類を襲う。人類は対抗勢力を組織するが…。そして弱冠１５歳の少女がこの戦いのキーパーソン。

プロローグ（前書き）

楽しんでください

プロローグ

――世界は狂喜に満ちていた――

人類が環境破壊を続けた結果、地球は滅亡寸前に追いやられた。

しかし、そのとき一つの抑止力が働いた。

世には得体の知れない謎の…ここでは仮に生物と言うことにしておこう…が姿を現わし始めた。

追い詰められた星の最後の抵抗とでもいうのだろうか――――

その生物…人類はそれらをドールと呼んだ…はヒト並みの知能を持ち、高い運動能力、そして何よりも組織で動いていた。

人類や文明を機械的かつ効率的に破壊していく彼らに我々は錯乱し、畏怖の感情を抱いた。

しかし、人類も黙ってはいなかった。

すぐさま対策を練ったあたり、人類もただの蓄群ではない。

人類は未知の生物への対抗勢力として、ホワイトクロスという組織を作った。

効果は抜群だった。

押されっ放しであった人類だが、形勢は逆転しつつあった。

すると、今度はヒトの組織の中に亀裂が走った。
もしも、完全に未知の生物を撃退できたとき、人類はさらに文明を発展させるべきか否か――――

大多数の人間は発展を望んだ。

しかし少数の人間は未知の生物の登場は発展し過ぎた文明に対する危険信号だと認識する。

そして彼らはホワイトクロスを抜け、ＥＡＲＴＨという組織を新たに結成した――――

三つの勢力ができたことにより、状勢は不安定に。

そして起こるべくして一つの大戦争が勃発した。
のちに一次戦役と呼ばれるその戦争は各勢力に多大なダメージを与えた。

そして一次戦役にて、ホワイトクロス軍、弱冠１５歳の少女が小隊長を務める小隊が大きな戦果を上げていた。

導入

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピ……

「ん…」

やかましく電子音を発している目覚まし機を止める。

基本的に朝は苦手だが、今日は軍の会議があるので早起きが義務付けられていた。

周囲に見渡すと、いつも枕元においてあり、昨夜寝る前に使用していた音楽再生機器の電源が入りっぱなしであるのを発見した。

「そのまま寝ちゃったか…」

気怠そうにベッドから身体を起こし、電源を落とす。

服を着替え、そのまま洗面所まで足を運び、身嗜みを整え、台所で、買い置きのパンの中から一つを選び食べ始める。

毎日繰り返し行なっている動作である。

朝食を終えると、一服しようとベランダに出て、葉巻に火をつける。

といっても、彼女の葉巻にはリラックス効果のあるハーブしか入っておらず、体にはほぼ無害である。

———昔、大空は青く綺麗だったのだろうな———

軍寮のベランダから見える茶色く濁った空をみつめ、彼女は想う…

そして深呼吸をし

「行くか」

と呟き、自室を後にした。

軍寮と軍の施設は繋がっているので、会議開始ギリギリの時間に出ても間に合った。

そこにはすでに各小隊長がそろっていた。

弱冠１５歳の彼女もそのうちの一人だった。

そして彼女は数少ない、特能持ちの一人であった。

特能持ちとは、大切な何かと引き換えに、協力な能力を手に入れた人間のことだ。

小隊長には中佐～准将の人間が抜擢される。

彼女は大佐なのであった。

アリア・カトレア

弱冠１５歳にして特能持ちの大佐、小隊長を務め、一次戦役にて多大な戦果を上げた少女とは彼女のことだ。

位と高い戦闘力から、彼女を一目おく人間もいれば、疎む人間もい

た。

さまざまな好奇の視線を浴びるのには慣れていた。

１５歳の少女が議席を一つ埋めているという今現在の状況における周囲の視線もまた然りだ。

「第１～１２小隊長、全員出席を確認しました。
これより会議を開始します。」

カナン中将の合図で会議が始まった。

この西方支部の支部長が若い彼だった。

彼は武闘派ではなく、頭脳派であるとされているが、それはあくまで周囲からの評価で、事実は謎である。

彼も若くして中将まで上り詰めた身だ、何があってもおかしくない。

「最近、各地方で不穏な動きが見られます。
それは西方に限ったことではありません。
放っておくと大事になりかねませんので、早めに粛正をお願いします。」
会議の内容は主にこれだけであった。

しかしカトレアの胸のなかには、またもや嫌悪感しか残っていなかった。
―――また町の中で戦うというのか…勝手な…
そして戦いは戦いしか生まないのに…
早く、早く本当の意味で終わらせないとっ！！―――

彼女が軍に入った目的は、彼女が憎むべき大人を、軍を内部から壊滅させることであった。

カトレアは人類は必要ないと考えていた。

布石

その後の会議で、カトレアが小隊長を務める第４小隊と、第８小隊が共に西方地区全域をパトロールすることが決められ、カトレアと第８小隊長は共に施設外へと続く廊下を歩いていた。

「あーぁ、たった２小隊で西方全域なんて信じらんない。」

第８小隊長、桃色の忍装束を纏った、くのいちのコノミ・サクラが嘆息と共に愚痴る。

「私の隊とサクラさんの隊のタイプの組み合わせなら可能…、と支部長は考えたのでしょうね。」

今日、一言も会話を交わしていなかったので、挨拶がわりにカトレアは応える。

彼女はカトレアを特別扱いせず、一人の人間として対等に接してくれる数少ない友人の一人であった。

「仕方ないか…。

あんたの隊とは何かと腐れ縁だねぇ。」

「私もつくづくそう思いますよ。」

しかし、実際彼女らの隊の連携は見事であった。

一次戦役時。

隠密、暗殺を得意とする第８小隊と正面戦闘ではトップ級の第４小

隊の協同戦線で大きな戦果を上げたことは有名な話であった。

「では、またのちに会う機会があれば」

「じゃ、またねぇ」

施設出口付近で、軽く別れの挨拶を交わすとサクラは軽快に跳び去っていった。

「ふぅ…」

カトレアはこれからの仕事の膨大さに溜め息をつくと、愛用の音楽再生機器『Ｅ－ＮＡＣＨ』のイヤホンを耳に装着し、音楽再生ボタンを押した。

そして濁った空を見上げて

「やるしかないか…」

と呟くと、隊員たちの待つ場所へと向かって歩み出した。

『いつもの』にて

軍が置かれている、この街【ウェスト】は、工業が盛んであった。
街には多数の工場が立ち、無数のパイプラインが巡っている。
もちろん、軍で使われる武器、防具なども、これらの工場で造られていた。
西部は、当国で唯一の臨海地方であった。
そして西部の中でも、さらに西端の、この街の臨海部ではコンビナートが形成されている。
そんな【ウェスト】を一望できる小高い丘のてっぺんがカトレア達、第４小隊の『いつもの集合場所』であった。
カトレアの部下たちは有能であった。
比較的、少数と言われながらも、他の小隊に勝るとも劣らなかった。
よってカトレアは普段から一般兵を無駄に多く引き連れるようなことはしなかった。
隊の中での主要の人員を何名か選び出しており、連絡なども全てこの主要員を通して一般兵に伝えているのだ。
しかし、カトレアは大規模戦争時以外は一般兵を出撃させないという信念の下で任務遂行に当たっているので、小戦闘や、今回のような巡回もまた、カトレアと主要員のみが行なっていた。

「…というわけで、これより街の巡回…
まぁ、正確に言うと不穏分子への牽制、調査なんですが…
ともかく、任務にあたります。

あっ…
ちなみに今回はサクラさんたちの小隊との合同任務となります。
各員の健闘を期待します。」

『いつもの集合場所』に集まった主要員たちに任務概要を告げる。

「不穏分子か…
ＥＡＲＴＨのやつらですかね？？」

「エル…」

主要員の一人、軽装に身を包み、『エル』と呼ばれる金髪の青年、
エレーノ・ダーヴィッツがカトレアに疑問を投げかける。

「ＥＡＲＴＨのやつらも言ってるこたぁ、ご立派だが、やってること
とはテロとなんら変わらねぇ
また余計なことなんざ考えていやがるんだったら早いとこ叩かねぇ
とな」

それにカトレアではなく、袴を羽織り、腰に刀を提げた渋めの男、
マサムネが応える。

「そうですね…。
まだ不穏分子がＥＡＲＴＨなのかはわかりません。
ドールの可能性だってあります。

あとＥＡＲＴＨの人たちを無闇に卑下するのはよくないと思います。
彼らが掲げている信念こそは見習うべきだと…」
「あーはいはい…」
カトレアの言葉を途中でマサムネが遮る。
「お嬢のＥＡＲＴＨ贔屓は相変わらずだねぇ」
「僕も多少は疑問に思います…」
エルがすかさずマサムネに同調する。
「彼らは…
方法が悪いだけです…」
実際、最近カトレアは組織の内部破壊のためとはいえ、バカげた思想を持ったこの組織にいつまでも所属しているのもどうかと思い始めていた。
しかし、カトレアのような少女が社会的に優位に立つには大組織であるホワイトクロスに所属するほか無かった。
「まぁいいか
とりあえず街の巡回だろ??」
気まずい雰囲気を断ち切るようにマサムネが切り出す。

「とりあえずは、そういうことです。」

カトレアも切りかえる。

「じゃあ行きましょう。」

エルはなぜか嬉しそうだ。

……そんなやり取りを少し離れたところで傍観する少年が一人。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2196c/

determent

2010年10月10日02時36分発行